家庭数

学校だより

いなほ 稲穂

学校教育目標
夢をもち、たくましく生きる
子どもの育成

市川市立平田小学校　No.25　Ｒ６年３月１日

～共に学ぶ 共に育つ 共に感動する 共に未来を創る～

校長　蜂須賀　久幸

思いやりのバトン～Pay it forward～

誰もが人に助けてもらったり親切にしてもらったり、辛いときにかけられた一言が忘れられなかったりする経験が一つはあるはずです。そして、思いやりある行動を受けたとき、誰もがうれしくなるものです。ただ、その気持ちをいつか返したいと思っているのに、実現できないまま時間ばかりが過ぎるということはないでしょうか。“親孝行 したいときには 親はなし”とはよく言ったものです。

思いやりへのお返しの方法の一つに「恩送り（Pay it forward）」という考え方があります。ＳＮＳ動画でも登場しますが、なかなか耳慣れない言葉かもしれません。漫画『江戸前の旬』の登場人物のセリフを引用すると、“ご恩送りというのは、自分の受けた恩を他人に与えるという意味だ。そして、他人に与えた恩はいつか自分に返ってくる。”と解釈できます。「情けは人の為ならず」に似ていますが、言葉に温かみを感じるのが「恩送り」といえるでしょうか。

作家 井上ひさし氏には、次のようなエピソードがあります。生意気盛りの 15 歳の時、岩手県一関市の本屋に入って、こっそり国語辞典を持ち出そうとしたそうです。いわゆる万引きです。店番をしていたおばあさんがそれを見つけ、ひさしを店の裏手に連れていき、薪割りをさせたといいます。ひさし自身、罰だと思ったそうです。でも、薪割りが済むと、おばあさんはひさしに国語辞典をくれるというのです。「働けばこうやって買えるのだよ」と言って、辞書代を差し引いた労賃までくれたそうです。のちに作家になったひさしは、「おばあさんは、私に誠実に生きることの意味を教えてくれた。いくら返しても返しきれない大きな恩」と回想したといいます。

さて、大人も子供も、年月の長短関係なく、様々な人のおかげでここまで生きてこられたと考えられます。様々な人の中には、名前も顔も知らない人だっているかもしれません。知らないうちに助けられていて、今も気づかずにいることだってあるかもしれません。そう考えると、「恩送り」は日常に溢れているようにも思えてきます。ですから、「恩を受ける」ではなく、「恩を受け継ぐ」と考えてみると、少し肩の力が抜けていくような気がします。少しだけ嬉しいことをしてもらったと感じたら、急がなくてよいので、ほかの誰かに自分からアプローチをしてみるということを心がけたら、幸せな気分になれて、幸せな社会が築けそうです。さらに、送った恩はめぐりめぐって誰かを幸せにして、やがて自分や家族に返ってくるかもしれません。

さらに、親から受け継いだ「命」を「恩」ととらえれば、大切に育んで次世代につないでいくことも立派で重要な「恩送り」ではないでしょうか。今年度も残り少なくなりましたが、この「恩送り」という言葉を大事にして「思いやりのバトン」つないでいきたいと思っています。

道路舗装工事に伴う車両通行止め等のお知らせ

ガス管埋設後の舗装工事を行うため、正門(赤門)に向かう周辺道路で、午前９時から午後５時までの間、車両通行止め及び一部片側通行などの規制があります。登下校等で周辺を通行する場合には、ガードマンの指示に従ってください。

短所は長所で隠れる！

企業のキャッチコピーに、『お、ねだん以上』というフレーズが、耳に馴染んでいる人は少なくないのではないでしょうか。ニトリのＣＭです。

このニトリホールディングス会長 似鳥昭雄氏は、発達障害（注意欠如多動性障害）だとインタビューで答えています。小学校４年生になっても自分の名前を漢字で書けず、成績はいつもビリ。先生の話を１分も聞いていられない子供だったといいます。今でも整理整頓はできないし、無くし物をよくする、人の言うこともじっくり聞いていられないといった様子を自覚していらっしゃいます。

他の人とは違うということを子供のころから感じており、将来に対する不安も大きかったといいます。ただ、好きなことには集中できるので、高校卒業する頃から「人のやらないことをやろう」と考えており、こんな物があったら便利だなといった様々なアイディアを考えて図面を描いていたそうです。

似鳥氏は言います。「自分が何を得意とするかは、いろんなことをやって、自分で見つけることです。人間、一つくらい何か“これ、いけそうだな”というものがあるはず。それを早く見つけること。長所が見つかると、短所が隠れちゃうんだよね」と。周りからは変わった人だと今も言われるそうですが、「発達障害のおかげで、人が考えつかないようなことを考えられる」と語る姿は、同じような悩みを抱える子供たちや保護者への応援メッセージに聞こえるのです。私たち教職員は、どの子もありのままの自分を好きになれるように等しく応援していきます。

《2021/7/20 朝日新聞 一部引用》